

まきちゃんと竹であそぼう

代表者 藤野 真江 (教育B2年)
構成員 竹友 美樹 (人文B4年)

1. プロジェクトについて

本プロジェクトは、学校にある必要とされていない竹を何とか利用できないかと考えたところから始まりました。このプロジェクトでは大きく2つの活動を考えています。1つ目は、竹箸づくりを通じて、留学生や地域の人と交流をはかり一緒に、ものづくりの楽しさを学びます。また、環境について考えてもらうため要らないものを必要なものに变化させることや、箸で食事をする日本の文化・マナーについて体験してもらいます。2つ目は、竹を加工して彫刻を施せたらと考えています。ここでは竹のもつ質や魅力を、実際に触れて引き出していきたいです。

2. 活動内容

留学生・小学生向けの体験活動、構成員の制作活動を進めてきました。以下、実施した企画の概要と結果の報告を行います。

2.1 竹の準備

●活動概要

- ・ 実施日 : 6月3日 (伐採した日)
- ・ 活動内容 : ①農学部裏の竹林から2本の竹を伐採
②約30センチメートル以下に切り乾燥

●気づきと反省

本物の竹は、予想していたより遙かに長く重いもので、2人でもなんとかできるだろうという考えがかなり甘かったと思います。次回竹を取りに行くときは、参加者を募り大人数で行うか、台車に乗るサイズに切って運ぶか、など、様々な手段をよく検討してから実行したいです。

竹を乾燥機に入れるために竹の長さを30センチメートル以下にしなければならませんでした。長い状態の竹から少しずつ切り出していくのは簡単でしたが、その切り出した竹を30センチメートル以下にするのにはとても苦労しました。万力で固定しても滑ってしまいクルクルと回転してうまく切ることができないのです。調べてみると濡らした布を竹に巻くといいということが分かりその後の作業時間を短縮することができました。

乾燥機には丸1日以上いれました。すると、いくつかの竹は焦げたような色になり、多くの竹が乾燥機から出すと次々に割れていきました。この乾燥機を使ったことのある人によると、割れるのは普通のことだが、焦げるのは、60度程の低温だったとはいえ長時間入れすぎたことが原因かもしれないということでした。初めて使うのだから、少しずつ様子を見に行くべきだったと思います。また、乾燥機に入れると出したときに割れてしまうため、竹の用途によっては、使用を控えるようにしようと思っています。油抜き別の方法(湿式法)も試していきたいです。

2.2 サマープログラム

●活動概要

- ・ 実施日 : 7月12日, 7月26日
- ・ 対象 : 留学生 (1回目10人, 2回目14人)
- ・ 場所 : 学生自主活動ルーム
- ・ 活動内容 : 竹の箸や箸置きを削り着彩

●気づきと反省

サマープログラムは2回活動しました。実際にやってみて、留学生の様子を見ると、彼らには私が説明したこと半分の理解できていないことに気づきました。材料の準備では竹を箸の長さに切って、先を小刀で削ったこと、作業ではまず紙やすりで表面を削っておいてから着彩すること、箸の半分から上にだけ着彩して欲しいこと、着彩においての発色に効果的な色の順番、水の分量などについて、日本語の難しさと情報量の多さ、説明に

おける配慮（現物を見せながらの説明、ゆっくりと簡単な言葉で、など）が不十分で、理解しにくかったようです。濃い緑や茶色をした竹の上に黄色を直接塗ると色が沈んでしましますが、その説明をしているときも、みんなきょとんとした顔をしていました。以上より、2回目は説明の分量を減らしました。というのも、1回目では留学生は説明した方法ではできていないものの、自分達なりに工夫してうまくやりぬけていました。だから、説明を「ザラザラ」を「ツルツル」に、と、箸の半分から上だけ色塗り、の2点に絞りました。理解できない説明を受ける不安を取り除くことができ、結果的にしっかりと作業に集中できていたようです。

道具の準備にはかなりの時間がかかりました。竹は、外側は縦に繊維があり柔らかく削りやすいのですが、内側はとても堅く、小刀でもなかなか思うように削れません。電動で削れる機械を試しましたが、それだと逆に荒さがなさ過ぎて、参加者に「ザラザラ」を「ツルツル」にしてもらおう醍醐味が薄れてしまうのではないかと考え、結局小刀で地道に進めていくことになりました。



第1回サマープログラム

2.3 ヤマミィ学級

●活動概要

- ・ 実施日 : 8月21日
- ・ 対象 : 小学生12人
- ・ 場所 : 大学会館
- ・ 活動内容 : ①色の環についての体験学習
②竹の箸、箸置き、ペン立てに着彩
③色や竹に関する絵本の読み聞かせ

●気づきと反省

今回は、2時間の設定でした。小学校低学年生もいたので、安全面から竹を削る工程は省き、代わりに色の勉強の時間を設けることにしました。予定では、1時間程度色の勉強をして30分程で竹に色を塗り、残り時間で色や竹に関する絵本の読み聞かせをしてもらおうと思っていました。しかし実際やってみると、予定どおりとはいきません。参加してくれた子ども達の中には低学年生も高学年生もいて、作業の進度にはかなりの差がありました。みんなが終わるのを待ってから次に移っていくスタイルは、成長段階に幅のある集団においての活動では、少々非効率的であると感じました。作業の進み具合を見ながら進度を考えるだけでなく、ある程度は時間で作業を区切る必要があると思いました。

サマープログラムでは留学生向けに行いましたが、留学生と小学生では、全然違うと感じました。留学生の場合、簡単な日本語かつ僅かな情報しか伝えられませんが、作業は長時間集中してできていました。しかし、小学生は簡単な日本語でも多くの説明を理解してくれますが、作業中はどんどん話しかけてくるし、一人ひとりの進度にもかなりの差がありました。一緒に活動する人間がどういう人なのか、どういう方法が最適かを考え、彼らの多くが有意義な時間を過ごすことができたと感じてもらえるよう、それぞれに合った対応をしていきたいです。



ヤマミィ学級でペン立てに着色する様子

2.4 イルミネーションツリー点灯式

●活動概要

- ・ 実施日 : 11月30日
- ・ 場所 : 山口大学正門付近
- ・ 活動内容 : 竹のランプシェイドの展示

●気づきと反省

11月30日にツリーのイルミネーション点灯式がありました。そのイベントに本プロジェクトも竹のランプシェイドで参加させていただきました。ランプシェイドは、20～30センチメートル程度の長さにまっすぐ切ったり斜めに切ったりし、その表面にドリルで穴を開けて、筒の中のろうそくの光が優しく漏れるようにしました。今回の準備では、切り口を斜めに切るのと、ドリルで均等な間隔で穴を開けるのが難しかったです。斜めに切るときは、丸鋸を利用するのがオーソドックスなやり方とされています。しかし割と大がかりな道具であるため、既存の手鋸で切りました。切断したい部分に印をつけて表を切った後、ひっくり返して裏を切り、表の切った端の部分と合わせるのにはとても苦労しました。ランプシェイドの制作の中で、ドリルの扱いは特に難しく、使いこなせるようになるために竹に大量の穴を開けて練習しました。近くで見ると等間隔でない箇所やムラが目につき



ドリルで竹に穴を開けている様子

ましたが、暗くなり、ろうそくを灯して離れると、予想以上に趣があり、イベントを見に来ていた人達にもたくさん見ていただくことができて、時間もかかるし大変でしたが、作って良かったなと思いました。今まで少人数の留学生や小学生向けにしかイベントを行ったことがなかったので、新鮮な感覚でした。大変でしたが、参加して本当に良かったです。

3. 振り返り

これまでの「まきちゃんと竹であそぼう」での活動を、PDCA サイクルに当てはめて振り返っていきます。

PDCA サイクルは、まず誰が何をどうやってするかなどを考え、想定されるリアクション・危険にも対応できるよう計画を立てるところから始まります。そして、プロジェクトのメンバーおよび参加者が活動に取り組み、その後立てた計画に対する活動の内容・結果を分析します。その分析を基に、問題点を明らかにし改善策を考え次の計画に繋げていきます。(図1 参照)

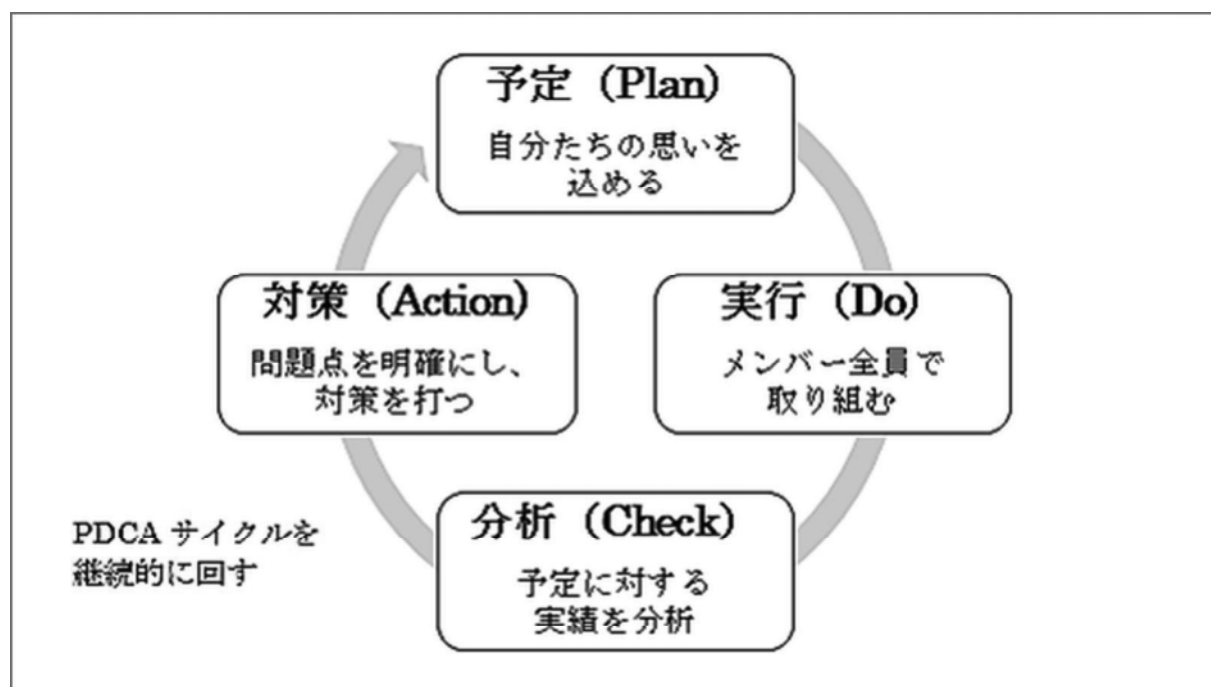


図1 PDCA サイクル

まず、竹の準備に計画との相違が生じました。竹の重さが予想よりも重かったため2人では困難でした。結果時間が予定の倍以上かかりました。今後はあらかじめ担当者や経験のある人に話を聞いて下調べを行って計画を練りたいと思いました。計画と実際の活動が相違することは、よくあることだと思うので少しでもその差異を縮めることのできるよう計画の段階の情報集めに正確性を求めて行きたいと思います。

サマープログラムでは留学生に説明する際、伝えたいことが多すぎて上手く伝えることができませんでした。対策として、説明を本当に重要な2点に絞ることにしました。今後さらに重要な点をレジュメで配るなど工夫をしたいと思います。

ヤマミイ学級では、作業が予定より大幅に押してしまい、最後が駆け足になってしまいました。あらかじめ参加者にやってもらう内容のシミュレーションをして、それぞれのステップでどれだけの時間がかかるのか、この活動を通して何を欲したいのかを明確にし、重きを置くポイントを意識しながら実行に移すようにしたいです。

イルミネーションツリー点灯式では、一度穴を空けてしまえば元には戻せないことに注意しながら、慎重に作業を進めることで、見る人に感動を与える作品に仕上げることができました。

今後は、これまで以上に予定通りに行かないことに直面することになると思います。実行した結果が、計画に添うものにならないかもしれませんが、それでも、今日より明日、今回より次回はより良くなるよう振り返り、評価していき、分析した結果を対策として練って、また次の計画に繋げていくサイクルを怠らずに、活動を行っていきたいです。